



年間第 18 主日 マタイ 14:13-21

ここにしかない、食べ物がある

今週は福音朗読に「五千人に食べ物を与える奇跡物語」が選ばれました。「ここにしかない、食べ物がある」とまとめたいと思います。「パン五つと魚二匹しかない」その持ち物をイエスのもとに持っていくことで、何が起こるのでしょうか。

この奇跡物語を考えるために、20年以上前に出会ったある家族を紹介したいと思います。司祭になる一年前、助祭だった時に福岡で実習に通っていた西新教会に所属している家族でした。

この家族は日曜日 10 時のミサに参加するために、2 時間かけて通っていました。たとえばそれは、奈良尾に住んでいて、仲知教会のその先の米山教会に通うようなものです。高校生女子と青年がいる 4 人家族でした。しかも、ほぼ毎週この家族はミサに来ていました。

わたしは、一度だけこの家族の家を訪ねたことがあります。同じように、2 時間近くかかりました。福岡の中心部から 2 時間あれば、場合によっては長崎まで来てしまいます。そういう環境にあって、ほぼ毎週ミサに来るのは、よほどしっかりした考えがなければ続けられないのではないのでしょうか。

この家族が日曜日に教会に来ると、高校生と青年の 2 人は教会活動を積極的におこなって 1 日を過ごしました。あるときは気分転換でわたしたち神学生が呼びかけてボーリングに行くこともありました。

彼らにとって、日曜日の教会は 1 週間の中でかけがえのない時間だったのだと思います。どんなかけがえのないものが、日曜日の教会にあるのでしょうか。そのことを今週の福音は教えてくれます。

イエスを慕って集まった五千人もの人々は夕暮れになってもまだイエスのもとにとどまっていました。弟子たちは、食べ物の心配をし始めました。食べ物は、人里離れたこの場所ではなく、町や村にしか見つからないと考えたからです。

けれどもイエスは、「行かせることはない。あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい。」(14・16)と言いました。群衆が必要としている食べ物が、町や村ではなく、ここで用意できるということです。

日本語の聖書で、興味深い言葉遣いがあります。弟子たちは「ここは人里離れた場所で、もう時間もたちました」(14・15)そして「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」(14・17)とイエスに納得させようとしています。ところがイエスは、「それをここに持って来なさい」(14・18)と答えているのです。

弟子たちは「ここは何もない場所です」「ここには手持ちが何もありません」と言っているのに、その何もない「ここ」で、奇跡を始めるのです。イエスはあえて、人里離れた場所で、「わたしが五千人に食べ物を与える」という意思表示をおこなったのです。イエスがいる場所こそ食べ物がある場所、ここにしかない食べ物がある場所なのです。

教会に2時間かけてくるあの家族は、日曜日のミサの中に、自分たち家族の食べ物があることを承知していました。ここにしかない食べ物があることを、時間とお金をかけて、周囲の人々に証明していました。

わたしたちは、幸いに15分もかからない距離に教会があります。バス代も電車代もかけずに、歩いて15分でほとんどの人が日曜日のミサに集まることができます。わたしたちはなおさら、イエスがおられるこのみことばの食卓と聖体の食卓は、ここにしかない食べ物であると証しする必要があると思います。

今日、上五島地区の青年が、自分たちの青年キャンプの呼びかけのためにミサに参加してくれています。一泊二日のキャンプで、感謝のミサで締めくくられるようになっていきます。感謝のミサはわたしにお願いしてきました。

青年たちこそ、イエスのもとに食べ物があることを深く心に刻んでほしい世代です。青年キャンプに参加する青年は、浜串小教区にはもしかしたらいないかもしれませんが、ミサの後に募金箱を持って玄関に立つそうですので、青年キャンプの成功のために少しでも協力していただければ幸いです。

イエスは、群衆をご自分のもとに留めおいて、「ここにしかない食べ物がある」と教えてくださいました。わたしたちも、ミサに集まるたびに「ここにしかない食べ物」を確認しましょう。そして、かけがえのない食べ物に養われていることを、生活の中で証ししましょう。そのための知恵と力を、ミサの中で願いましょう。